

英国国立公文書館 (Kew)  
(Public Record Office, Kew)



昨年の夏、ヨーロッパは猛暑の中にあつたが、ロンドンもその例外ではなかつた。私が英国鉄道のキュウ・ガーデンズ駅に下り立ったのは、7月の初めであつたが、かっと照りつける強い日差には、すでに朝の気配は感じられなかつた。ロンドンの中心より約15km、王立植物園への観光客が乗降するこの駅は、テムズ河に沿って建つ国立公文書館 (Public Record Office, Kew 以下 PRO, Kew) への最寄駅でもあつた。

当時私は、米国ワシントン D. C. に駐在し、国立国会図書館による米国国立公文書館所蔵日本占領関係文書の収集プロジェクトに従事していた。PROを訪ねる機会を得た私の関心は、当然に同館が所蔵する日本占領関係資料の調査にあつた。PROは、ロンドン市の中心、チャンセリイ・レーンにある旧館と、郊外のキュウ新館とから成るが、調査対象となる外務省、陸軍省等の文書は、PRO, Kewにて保管、公開されている。

5階建て、正方形のPRO, Kewの建物は、1,2階を閲覧及び事務用スペースとし、書庫を3,4,5階に配している。紫外線から資料を守るため、3階以上の窓を極端に細くしたその外観はユニークである。“記録類をいかに迅速に利用者に提供するか”設計時に最も考慮されたこの課題は、各階中央に位置する貸出しコア、水平・垂直コンベアの利用、コンピュータ・ターミナルを使つての資料請求と出納処理により、平均15分での資料提供を可能にしている。

英国では、公文書は一般に、その作成より30年を経過した翌年の1月に、PROにおいて公開される。そのことは、1952年4月をもって終了した連合国による日本占領に関する資料は、1983年1月に、国家機密、プライバシーの保護等を理由に非公開とされた資料を除き、すべて解禁となつたことを意味する。これらの内容を調査するには、1966年分までが収録されている“Guide to the Contents of the Public Record Office Vol. III”及び、それ以後については、2階レファレンス・ルームに備え付けられているタイプ印刷の目録類を調べることになる。

第2次世界大戦及び日本占領に関する主な資料群には、次のようなものがある。  
WO (War Office) 32 : Registered Papers : General Series : Subject : Overseas : Japan  
WO 172 : War of 1939-1945, War Diaries

WO 203 : War of 1939-1945, Military  
Headquarters Papers, Far East

WO 208 : Directorate of Military  
Intelligence

WO 235 : Judge Advocate General's  
Office : War of 1939-45 : War  
Crimes Papers

FO (Foreign Office) 371 : General  
Correspondence, Political (Far  
Eastern) Japan

保管資料総てが索引化され、個々にコード番号が付されている。資料請求には、レファレンス・ルームに置かれたコンピ

ュータ・ターミナルを使い、リーダーズ・チケット番号、座席番号、要求する文書のコード番号を入力すればよい。米国立公文書館において、目録類の整備が追いつかず、未だに資料発見にアーキヴィストの名人芸が幅を利かしているのと対照的である。

米国での収集資料との重複も目立つが、日本占領における英国の役割、英国軍による戦犯裁判等の検証に、PRO、Kew の関係資料は不可欠であり、近い将来における収集が期待される。

(連絡部国際協力課 千代正明)

(26ページより続く)

開架式で、2階壁面の図書は回廊に上って取り出すようになっている。階下はホール状の大閲覧室であるが、その時は一人の利用者も見当らなかつた。新刊書がほとんどない事も一因かも知れない。閲覧室の隣り、館員の奥の部屋に19世紀以来の官報が製本され、配架されている。そこには数か月前、ポルトガル本国から来た中年の女性研究者がいて、しきりとペンを走らせていた。

また市庁舎の背後の丘上には、「何東紀念図書館」(Biblioteca "Sir Robert Ho Tung")がある。蔵書は『永楽大典』など明本の写本に、洋装本を含め1,000冊程度に過ぎない。ちなみに何東(1862-1956)は香港の有名な大富豪で、教育や慈善事業面で貢献した。何でもビブリオテカ・ナショナルの館長は「何東図書館長」を兼任するようである。

結局、日本キリスト教史研究者として名高いテイシェイラ(Manuel Teixeira)

神父の話や、その紹介で訪問した「歴史文書館」での見聞でわかつたのは、戦前図書を所蔵するのが先のビブリオテカで、1945年以後の新刊書は、文書館に同居するビブリオテカ分館が担当することである。なお当文書館は本国政府の文書館から、マカオ関係部分をマイクロ資料で送付を受けている、とのこと。

図書館活動の沈滞ぶりは、それが位置する市中心街ですらその存在が忘れられていることから理解できる。官庁街の中央広場附近が舗装されているのみで、一歩外れると穴ぼこだらけの道路は水たまりだらけ。壁土も落ちかかり、軒を連ねた小店舗も薄暗く、貧弱な商品を高く並べている。道行く人—当然圧倒的に中国人だが—天気のおかげがあまり感ぜられない。過去の栄光を思い合せると、体の中を薄ら寒い一陣の風が通り抜ける感じであった。

(アジア・アフリカ課 中林隆明)